父の墓

岡本綺堂

青空文庫

都は花落ちて、春漸く暮れなんとする四月二十日、森青く雲青く草青く、見渡すかぎり蒼茫たる青山の共同墓地に入りて、わか葉の扇骨木籬まだ新らしく、墓標の墨の痕乾きもあえぬ父の墓前に跪きぬ。父はこの月の七日、春雨さむき朝、逝水落花のあわれを示し給いて、おなじく九日の曇れる朝、季叔の墓碑と相隣れる処を長えに住むべき家と定め給いつ。数うれば早し、きょうはその二七日なり。

初七日に詣でし折には、半破れたる白張の提灯さびしく立ちて、生花の桜の色なく萎めるを見たりしが、それもこれも今日は残なく取捨られつ、ただ白木の位牌と香炉のみありのままに据えてあり。この位牌は過ぎし九日送葬の朝、わが痩せたる手に捧げ来りてここに置据えたるもの、今や重ねてこれを見て我はそも何とかいわん、胸先ず塞がりて墓標の前に蹲まれば、父が世に在りし頃親しく往来せし二、三の人、きょうも我より先に詣で来りて、山吹の黄なる一枝を手向けて去りたる所志しみじみ嬉しく、われも携え来りし紫の草花に水と涙をそそぎて捧げぬ。きのうの春雨の名残にや、父の墓標も濡れて在しき。

父は五人兄弟の第三人にして、前後四人は已に世を去りぬ、随って我も四人の叔を失いぬ。第一の叔は遠く奥州の雪ふかき山に埋まれ給いしかば、その当時まだ幼稚き我は送葬の列に加わらざりしも、他の三人の叔は後れ先ちて、いずれもこの青山の草露しげき塚の主となり給いつ、その間に一人の叔母と一人の姪をも併せてここに葬りたれば、われは実に前後五度、泣い

てこの墓地へ柩を送り来りしなり。人生漸く半を過ぎたるに、已に四人の叔に離れ、更に一人の叔母と姪を失いぬ。仏氏のいわゆる生者必滅の道理、今更おどろくは愚痴に似たれど、夜や雨孤灯の下、飜って半生幾多の不幸を数え来れば、おのずから心細くうら寂しく、世に頼なく思わるる折もありき。されど、わが家には幸に老たる父母ありて存すれば、これに依って立ち、これに依って我意を強うしたるに、測らざりき今またその父に捨てられて、闇夜に灯火を失うの愁を来さむとは。悲い哉。

風樹の嘆は何人といえども免れ難からんも、就中われに於て最も多し。父は一度われをして医師たらしめんと謀りしが、思う所ありてこれを廃し、更に書を学ばしめたるも成らず、更に画を学ばしめたるもまた成らず、果は匙を投げて我が心の向う所に任せぬ。かくて我は何の学ぶ所もなく、何の能もなく、名もなく家もなく、飄然たる一種の道楽息子と成果てつ、家に在ては父母を養うの資力なく、世に立ては父母を顕わすの名声なし、思えば我は実に不幸の子なりき。泉下の父よ、幸に我を容せと、地に伏して瞑目合掌すること多時、頭をあぐれば一縷の線香は消えて灰となりぬ。

低徊去るに忍びず、墓門に立尽して見るともなしに見渡せば、其処ここに散のこる遅桜の青葉がくれに白きも寂しく、あなたの草原には野を焼く烟のかげ、おぼろおぼろに低く這い高く迷いて、近き碑を包み遠き雲を掠めつ、その蒼く白き烟の末に渋谷、代々木、角筈の森は静に眠りて、暮るるを惜む春の日も漸くその樹梢に低く懸れば、黄昏ちかき野山は夕靄にかくれ

て次第にほの闇く蒼黒く、何処よりとも知れぬ蛙の声断続に聞えて、さびしき墓地の春のゆうぐれ、最ど静に寂しく暮れてゆく。

思い出ずれば古年の霜月の末、姉の児の柩を送りてここへ来りし日は、枯野に吠ゆる冬の風すさまじく、大粒の霰はらはらと袖にたばしりて、満目荒涼、闇く寒く物すごき日なりき。この凄じき厳冬の日、姪の墓前に涙をそそぎし我は、翌る今年の長閑に静なる暮春のこの夕、更にここに来りて父の墓に哭せんとは、人事畢竟夢の如し。誰か寒き冬を嫌いて、暖き春を喜ぶものぞ、詮ずれば果敢なき蝴蝶の夢なり。

然れども思え、いたずらに哭して慟して、墓前の花に灑ぎ尽したる我が千行の涙、果して慈父が泉下の心に協うべきか、いわゆる「父の菩提」を吊い得べきか。墓標は動かず、物いわねど、花筒の草葉にそよぐ夕風の声、否とわが耳に囁くように聞ゆ。これあるいは父の声にあらずや。

遊く水は再び還らず、魯陽の戈は落日を招き還しぬと聞きたれど、何人も死者を泉下より呼起すべき術を知らぬ限は、われも徒爾に帰らぬ人を慕うの女々しく愚痴なるを知る、知って猶慕うは自然の情なり。されど、われは徒爾に哭して慟する者にあらず、女児のすなる仏いじりに日を泣暮す者にあらず。われは罪なき父の霊の、恵ふかき上帝の御側に救い取られしを信じて疑わず、後世安楽を信じて惑わず、更に起って我一身のため、わが一家のため、奮って世と戦わんとするものなり。哀悼愁傷、号泣慟哭、一枝の花に涙を灑ぎ、一縷の香に魂を招く、こ

れ必ずしも先人に奉ずるの道にあらざるべし。五尺の男子、空しく児女の啼を為すとも、父の霊豈懌び給わんや。あるいは恐る、日ごろ心猛かりし父の、地下より跳り出でて我を笞つこと三百、声を励まして我が意気地なきを責め、わが腑甲斐なきを懲し給わんか。

　孔子いわずや、四海皆兄弟なりと、人誰か兄弟なきを憂いん。基督いわずや、わが天に在す父の旨を行う者はこれわが兄弟わが姉妹わが母なりと、人誰か父母なきを憂いん。ましてわれは今やこの父を失えるも、家に残れる母あり、出でて嫁げる姉あり、親戚あり、朋友あるに、何ぞ俄に杖を失いし盲者の如く、水を離れし魚の如く、空しく慌て空しく悲むべき。父よ、冀くは我を扶けわれを導いて、進んで世と戦うの勇者たらしめよ、哀んで傷らざるの孝子たらしめよ。窃かにかく念じて、われは漸く墓門を出でたり。出ずるに臨みてまたおのずから涙あり。湿める眼をしばたたきて見かえれば、そよ吹く風に誘われて、花筒に挿みたる黄と紫の花相乱れて落ちぬ。鴉一羽、悲しげに唖々と啼過れば、あなたの兵営に喇叭の声遠く聞ゆ。

　おぼつかなくも籬に沿い、樹間をくぐりて辿りゆけばここにも墓標新らしき塚の前に、一群の男女が花をささげて回向するを見つ、これも親を失える人か、あるいは妻を失えるか、子を失えるか、誠にうき世は一人のうき世ならず、家々の涙を運ぶこの青山の墓地、芳草年々緑なる春ごとに、われも人も尽きぬ涙を墓前に灑ぐべきか。噫。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店
2007（平成19）年10月16日第1刷発行
2008（平成20）年5月23日第4刷発行
底本の親本：「文芸倶楽部」
1902（明治35）年6月号
初出：「文芸倶楽部」
1902（明治35）年6月号
入力：川山隆
校正：noriko saito
2008年11月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

父の墓

岡本綺堂

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/